

# 哲學研究

第百九十五號

第十七卷  
第六號

## 自覺、綜合、自然

下程 勇吉

A 明證の基準としての自覺(Cogito, ergo sum.)

一 内在的觀念と質存的存在(Sein u. Dasein)

二 デカルトに於ける「觀念」

三 デカルトに於ける「精神」「思惟」

四 Cogito, ergo sum.

五 プレンタノの内部知覺

六 明晰判明なる知覺としての Cogito

七 作用意識の瞬間性と我の存在

八 内部知覺に於ける個別化的契機の排除

九 意識(思惟)と我

一〇 認識論的契機としての直觀に依る充實

自覺、綜合、自然

## 一一 註釋(其の二)

自我の連続性の問題

## 一二 註釋(其の二)

バラギエの批評

## 一三 明證性と普遍性

## A 明證の基準としての自覺 (Cogito, ergo sum.)

## 一、 内在的觀念と實存的存在 (Socin u. Dasein)

明白なる方法的自覺を以つて出發し一切認識の基準たるべきアルキメデスの不動點を目標として思索の歩を進めたデカルトは、我々の陥り易き誤謬の重なるものとして内在的觀念の現存を根據としてそれに對應する外的なる實在的存在を措定することを擧げてゐる。「判斷に於ける最も主要にして屢なる誤謬は私の内なる觀念が私の外にある物に類似し對應すると判斷することにある。何となれば、私が單に觀念自體を私の意識の或る仕方として見、他の何物にも關係させぬ時は、確に觀念には誤謬を私にさせるやうな材料は殆んどないからである。」<sup>1)</sup>かくて觀念自體は自明的で誤謬を容れぬが、それに對應すると考へられる外的事物の存在は明證的でな

い。觀念に對應すると考へられる心外の存在或は「物」とはデカルトに依れば如何なるものであるか。觀念は思惟に屬し純粹内在的であるが、物體は「精神の特殊な緊張」を以て働らく想像力が觀念に對應するものとして蓋然的に措定するものに他ならない。<sup>2)</sup>或は物の存在は盲目的信仰に依つて立せられるにとゞまる。「其の觀念又は其の映像を感官に依るか或ひは他の仕方にて私に送り込むところの心外の物が存すると私が信ずるに到つたのは、確實な判断に依つたのではなく、唯盲目的なる衝動に基づいてゐるにすぎない。」<sup>3)</sup>かくてデカルトは内在的觀念と實存的存在とを明白に區別し前者には明證性を許してゐるが、後者は盲目的信仰に基づくと考へたと云へるであらう。

このことはアリストテレスの言を想起せしめる。彼は次の如く云つてゐる「各々の感官の領域に屬するものゝ知覺其物は正しい、或は極少度に正しからぬものを含む。それにつゞく把握即ち此の知覺せられたものは此の對象の規定であると云ふ把握には錯誤の可能性が入つて來る。吾々が知覺した或る物が白いと云ふことに誤はないが吾々が知覺した白が此の對象又はあの對象であると云ふとき、誤ることがあり得る。」<sup>4)</sup>これによりて見るとき、二人の大思想家は均しく *Sosein* と *Dasein* との

區別を明白に説いてゐる。併しデカルトの明證的觀念或ひは常に眞なる明晰判明なる知覺とアリストテレスの知覺とは全然同一であらうか。この點を考へ、更にはデカルトの明證論を明かにするため、我々はデカルトの觀念を今少し分析的に追窮して見たいと思ふ。

註

- (1) Descartes, *Meditationen über die Grundlagen der Philosophie* übersetzt von A. Buchenau, Dritte Meditation, 12, S. 30.  
 (2) Vgl. Descartes, *Op. cit.* Sechste Med. 3, 4, S. 62.  
 (3) Descartes, *Med. Dritte Med.* 18, S. 32.  
 (4) Aristoteles, *Über die Seele* übersetzt von A. Tasson, S. 64.

## 二、デカルトに於ける「觀念」

デカルトの觀念とは何を云ふのであるか。彼は「省察」の序言に於て觀念の二義性を分析してゐる、即ち觀念は第一に「悟性の活動作用」[Tätigkeit meines Verstandes (materialiter)] 第二に「其の悟性の活動作用に依りて表象された對象」(objective)の義に解されることを説いてゐる。<sup>1)</sup> これを見ると、今日、今日の現象學の根本テーゼの一にして重大なる區別即ち作用とその志向する意味との區別はすでにデカルトに於て明白にな

しとげられてゐると云へる。しからばデカルトは觀念なる語をその何れに用ひたであらうか。「序言」などの箇所よりせばそれは第二の場合即ちノエマ的に解せられたと考へられるであらう。それと同時にデカルトが明證を認めたのは志向的客體ではなくて寧ろノエシスの意識であつたと云へる箇所も少くない。「觀念が其自體に於て見られ、何か他のものに關係させられぬとき決して本來的に偽であり得ない、何故ならば私が山羊を想像するにせよ、キメラを想像するにせよ兩者ともに想像すると云ふ點に於ては均しく眞であるからである。」<sup>2)</sup>このときの觀念は現象學的に云へば作用性質の一なる想像作用としてノエシス的なるもの或は作用意識の義に用ひられてゐる。この點などよりすれば、デカルトが明證をみとめた觀念はノエシ斯的意識である、それはアリストテレスの明證知覺が「白」と云ふ語によりて明かなる如くノエマ的知覺規定であることに對立すると云へるであらう。このことは觀念に關して用ひられてゐる「思惟」「悟性」「精神」の意義を追跡し行くととき尙一層明確さを加へると思はれる。

註

(1) Descartes, *Med. Vorwort an den Leser*, S. 4.

(2) Descartes, *Med. Dritte Med.* 10, S. 29.

## 三、デカルトに於ける「精神」「思惟」

デカルトが明證を認めんとしたのは外部知覺でなかつたことは有名なる蜜臘の例<sup>1)</sup>に依つても明かである、彼はそれを外部知覺との對比に於て説いてゐる。外部知覺的に見れば蜜臘は刻々變化してゐる、其の變化する感覺的多様を超えて同一客體として蜜臘が把へられるのは何に依つてゐるか、それは外部知覺に依つてゐなければ、想像に依つてゐない。かゝる同一的なる把握を可能にするものは「思惟」「悟性」のみの洞察「私の精神に内在する判断能力」「人間精神」「悟性」であると云はれる。しかし、かゝる「精神」「思惟」「悟性」とは何を云ふのであるか。

デカルトに於ける「思惟する精神」なるものは、營養を司る魂(anima)とは全然異なつてゐるものである。それに依つて思惟する即ち意識する(Bewusstsein haben)ところのものが精神と呼ばれる、それは魂の一部でなく、思惟する限りの全き魂である<sup>2)</sup>。而して思惟するとは何を云ふのであるか。「思惟するものとは、疑ひ洞察し肯定し否定し意識し嫌惡し更には想像し感覺するものに他ならない<sup>3)</sup>。」デカルトの「思惟」はむしろ「意識すること」一般である。この點に合理主義的思惟に對するデカルトの思惟の

特色があると云ひ得るであらう。論敵ガッサンデイの辯難に答へる一節に於てデカルトは蜜臘の例に言及して次の如く云つてゐる「そこでは感官の助けをかりて働らく視覺感情 (*relin*)、知覺でなくて、見る作用、感じる作用の意識が問題となる、その意識には日常、睡眠に於て明かなる如く感官は必要でないのである。<sup>4)</sup>」かくてデカルトが明證性を許す思惟とは作用の意識に他ならない。「私が感覺或ひは想像に於てもつところのものは、私以外に於て無きものであるかも知れない、しかし感覺或は想像と名付けられる意識の仕方 (*cogitandi modi*) だけは、それが意識のある仕方として存する限り、私のうちに存することは確かである。<sup>5)</sup>」かくてデカルトが明證を認めんとするものは、ノエマ的意識質料であるとするより、ノエシスの意識であるとする見解がより妥當であると考へられる。

## 註

- (1) Descartes, *Med. Zweite Med.* 16—24, S. 22—S. 26.
- (2) Descartes, *Med. Antwort auf die fünfte Einwände gegen die zweite Med.* S. 328.
- (3) Descartes, *Med. Zweite Med.* 14, S. 21.
- (4) Descartes, *Med. Antwort auf die fünfte Einwände gegen die zweite Med.* S. 332.
- (5) Descartes, *Med. Dritte Med.* 2, S. 27.

## 四、Cogito, ergo sum.

而してかく「意識をもつこと」思惟することは自我の本質に屬する。「自我の本質性は自我が思惟してゐるものであると云ふ事のうちにのみ成立する。」<sup>1)</sup>如何なるものを疑ふも、疑ふこと自體、その思惟は疑ひ得ない、かゝる思惟自體に直證される自我の存在は疑ふことはできない、かゝる思惟のはたらき自體に自我の存在があます所なく生々と與へられるのである。「思惟こそは自我よりはなし得ぬ唯一のものである。我は在る、我は存在する、それは確かである。」<sup>2)</sup>「私が見てゐる限り或は私が見てゐると云ふ意識をもつ限り、此の意識をもつてゐる私自身が何物でもない」と云ふことはあり得ない。<sup>3)</sup>「私が見てゐるが故に蜜臘が存すると云へるならば、私が見てゐると云ふことがらからして正に私が見てゐるが故に私自身が存在すると云ふことが遙かに明白に結論される。」<sup>4)</sup>かくて作用の志向してゐる客體の規定については誤謬が入り得るが、志向する作用自體の意識とそのうちに直下にはたらく我の存在とは完全に合致して自明的で何等誤る所がないと云はれる。しかし我の存在、又は Cogito, ergo sum. は如何なる構造を有するのであるか。デカルトの思惟とは如何なる



ものであり、我の存在とは何を云ふのであるか。既にして「視覚、感情、知覺」ではなくて見る作用、感じる作用の意識<sup>5)</sup>であると云ふ、そのとき其れは布伦タノの内部知覺又は第二次意識と同一であるか。それと *Cogito, ergo sum.* とは如何なる關係を有するのであらうか。

註

- (1) Descartes, *Meditationes*; *Sechste M.* 17, S. 67.
- (2) Descartes, *Zweite Med.* 8, S. 20.
- (3) Descartes, *Med. Zweite Med.* 23, S. 26.
- (4) Descartes, *Med. Zweite Med.* 23, S. 25.
- (5) Descartes, *Med. Antwort auf die fünfte Einwände gegen zweite Med.* S. 332.

## 五、布伦タノの内部知覺

布伦タノは周知の如く、内部知覺と内部觀察とを區別してゐる、外的對象に注意を向け統覺的に對象をとらへる外部知覺或ひは第一次的意識と同一の仕方に於いて内部の心理現象を觀察するのは内部觀察である、しかし心的作用そのものの中に生き、生きることに於いて直下に心的現象を直觀する知覺は内部知覺であると云はれ

る。<sup>1)</sup> この内部知覺或は第二次意識は外部知覺なしには成立せぬがその明證性においてとは原理的に異なる意識であつて、如何なる意味においても誤謬を容るゝことなきをその特色とする。内部知覺は廣狹二義を有し、廣くは注意統覺等の意識をふくむが、本來的には何等誤謬の餘地なき作用の意識であると云はれる。<sup>2)</sup> かく云へば、見てゐる當のものゝ規定に於ては誤るも、見る作用の意識そのものは明證的であると云ふデカルトの *Cogito* と *Plen-ta* の内部知覺とは全然同一に歸するかの如く思はれる。

しかるにデカルトの思惟者としての自己自身の存在を直下にふくむ *Cogito* の明晰判明な把握を第二次意識と同一視した *Plen-ta* の見解を以つて、餘りにも自由な解釋であると考へるのは、オスカ・クラウスである。クラウスに依れば、デカルトの *Cogito, ergo sum.* は明晰判明なる統覺的把握である、併し内部知覺は *Plen-ta* 自からが「紛糾せる」(*konfus*) 「内含的なる」(*implizie*) 「不判明な」(*indistinkt*) と形容した如く區別を含んでゐない、デカルトには例外なく自明的なる第二次意識と判明にして展アウス開せられた自明なる認知 *Bemerkon* との區別がなかつたのである云々。<sup>3)</sup> この見解は直ちに認容せらるべき批評であらうか。デカルトは *Cogito, ergo sum.* を形容してつ

ねに「明晰判明」と云つてゐるが、我々は先づこの「明晰判明なる知覺」とは何を意味してゐるかを吟味して、上の問題を考へることにした。

註

(1) F. Brentano, *Psychologie*, I Bd. S. 40—41.

(2) F. Brentano, *Psychologie*, III Bd. S. 12—21.

(3) F. Brentano, *Psychologie*, III Bd. S. 133, S. 144. (Kraus' Anhg.)

## 六、明晰判明なる知覺としての Cogito

明晰判明とは何を云ふのであるか。先づ「明晰」とはあらはれた内容が生々と何一つ蔽ひかくされることなく露呈してゐるものである。デカルト自からの言にて云へば「注意せる精神に現存し且つ明瞭なるものは明晰なる知覺である、更にトワルドウスキ―は「生々してゐること」(Lebendigkeit)「遮ぎるものなきこと」(Offenheit)「注意性」(Aufmerksamkeit)の三者を以つて「明晰」を特色付けんとした<sup>1)</sup>。「明晰性」は他の言をもつてせば「十全性」(Adäquatheit)と云ひ換へ得るであらう。明晰性とは十全に充實された直觀のもつ性格である。

それに對して「判明性」とは明晰なると同時にその他の一切のものから分たれて明

瞭なるもの以外に何一つ自己のうちに含まぬものである。トワルドウスキーは判明性を特色付けるに「他の知覺に對する周到なる限界付け」なる語を以てしてゐる。<sup>2)</sup>かくて「明晰判明性」とは内包的には十全に充實せられると共に外延的にも精密なる限界付けを有するものであるとするならば、明晰判明なる知覺とは、注意的統覺に於て與へられる對象的なる規定の把握であるかの如くである。併しデカルトが *Cogito, ergo sum.* を常に明晰判明なる知覺と云ひ表はずとき、その明晰判明と形容されるものは果して對象的規定であるか。我々はデカルトの明晰判明性を進んで省察する時「明晰判明なる知覺」とは「内部知覺」と同一であると考へるトワルドウスキーの見解<sup>3)</sup>の方がデカルトの眞意により近きものなることを見出し得ると思ふ。デカルトは明晰なるも不判明なるものとして痛みの感覺を擧げてゐる。痛み程内的にして明晰なものはない、併し脚又は腕を失くしてゐる人はその失くした身體の一局部に痛みが存するか<sup>4)</sup>の如く感じることがある。單に感覺としては明晰であるが、その痛みが身體のある局部に存すると考へるとき誤ることがある、その限り痛感<sup>5)</sup>は判明ではない。痛感に對應する或物が一局部に存するとして空間的に其の存在と位置とを措定する把握には誤謬があり得る、故に我々は此の事態を自覺して、痛感を痛感とし

て感じることを超えて、其をある局部に存在するものとして把握することを差控へるべきである、之がデカルト誤謬論の重大なる歸結の一である。

明晰なる知覺にその存在<sup>ダイテイ</sup>を措定し空間的に位置をきめることが判明性を脅かすとすれば、明晰判明なる知覺は原理的には外部知覺ではあり得ない。何となれば其の感覺性質を自己をこえるものに空間的に歸屬せしめる局所限定 Lokalization に、外部知覺の根本的性質があるからである。而してクラウスの所謂「明晰判明なる統覺的把握」とは外部知覺的なる對象規定の把握に他ならない。クラウスの批評はデカルトが極力斥けた感官の明證性を「判明にして展開された自明的認知<sup>ベルゲン</sup>」の名の下に恢復せんとするものではあるまいか。デカルトが Cogito, ergo sum. を明晰判明なる知覺と云ふのは次の如き意味を出でぬと思はれる、Cogito と云ふ Sosein に自我の Dasein が直下に現れ、様々なる作用性質の各々なる分化態に於て自我は其の存在を直下に證示し現前化してゐる、こゝではその Sosein を超えて Dasein が局所限定的に措定される如き超越性の介在が現れてゐない。思惟即自我であり、自我即意識である。「思惟のみは私から分離し得ない、私が存在すると云ふことは確實である。」その意識する限り如何なる作用様態に於ても、自我の存在が直下に證示することが、Cogito, ergo

sum. に他ならぬ。その限り、自我の存在は明晰判明であると云ふ命題が、對象的に統覺的に注意し、認知ケルケンすることに依つて與へられる外的なる對象的限界附けの規定でないことは明かである。自我の存在を明晰判明であると云ふのは、箇々の作用に於いて自我の存在が直下に與へられるノエシスの規定の明證性を意味することを以てでないであらう。ブレンタノに依れば、外部知覺は外物の存在に對する盲目的なる信仰である、それに對し内部知覺こそは自明的なる知覺である。かゝる見地よりしてブレンタノは其の當否は別とするも、カントが内官に現象性を認めて明證性を許さなかつたことを難じてゐる。<sup>6)</sup> 内部知覺は對象的規定の意味に於て「不判明」なのではない。我々はブレンタノ自身が其の内部知覺を以てデカルトの Cogito と同一視せることの正當にして妥當なることを思ふものである。

内部知覺の根本的特色は、意識の仕方又は作用意識の各々の様態に於いて自我の存在が含まれ、Cogito の各々が直ちに sum を宿すところにある。それに對して外部知覺にては其の感覺的性質規定がその背後の存在たる物へ歸屬せしめられる、その限り統一者と屬性とは距離を有し、その内屬關係は偶然である。Cogito, ergo sum. にては其の作用様態とその統一者たる自我との距離が極小に遞下され、部分が直ち

に全體を表現する如き構造が見られるのである。外部知覺にては其の印象は記憶を介して再認的に反省されるが、内部知覺にては印象と反省とが無限に接近する十全意識が興へられる。その限り内部知覺は無限に速き反省とも云へる。又それは判断と云ふも肯否の對立に於て成立する一般の判断とは構造を異にしてゐる。それは名の示す如く知覺である。明晰判明なる知覺とは其の志向が十全的充實を將來し得る如き知覺として、肯定否定をこえて絶對的真を表はす。トワルドウスキーの云ふ如くデカルトの知覺とは判断の正の原因をなす *ratio* である、それは肯否の對立を含んで成立する判断に對する自由なる意志を絶對的に決定すべき根據をなすものである。それに對し觀念は判断の正の制約をなす *ratio* であり、判断の基體である。或はそれに關して或るものが肯定否定される對象である。即ち概念を基體とする判断は肯定否定の對立を含んでゐるが、知覺は肯定否定を超えて、それ自身絶對的なる眞をあらはすものである。しかもかゝる明證的知覺は内部知覺である。故にブレインタノは内部知覺或は心的作用に對する判断は主語述語の結合でなく内  
 的意識に於て表象される心的現象の單純なる承認であると云つてゐる。

註

- (1) K. Twardowski, *Idee und Perception*, § 5.
- (2) K. Twardowski, *Op. cit.* § 6.
- (3) K. Twardowski, *Op. cit.* § 7.
- (4) Descartes, *Mémoires, Seconde Méd.* 13, S. 65—66.
- (5) Brentano, *Psychologie*, III Bd. Zweiter Abs. Erste Kap. § 15. Brentano は感性直観に於て性質、延長性、形態性、位置の區別、強度の五契機を擧げてゐる (§ 11) 併し感性直観の區別は結局「性質的及び位置<sup>ローカル</sup>的區別」に歸するとのへて 920 (§ 15)
- (6) Brentano, *Psychologie*, III Bd. S. 67—69.
- (7) Brentano, *Psychologie*, I Bd. S. 201.

## 七、作用意識の瞬間性と我の存在

現在直下の意識に於て自證せられる作用意識又は内部知覺は、その任意の作用性質のうち直ちに自我の存在性を宿してゐる、その限りそれは自己を超えて他を指示する如き超越性は背景に退いてゐる、従つて其自身何等の延長性を有せぬ如く思はれる。デカルトは次の如く云つてゐる「私は存在する、それは確實である、併しどの程度にまで存在するのであるか、それは私が思惟する間だけである。」<sup>1)</sup>更に時間の持續についてデカルトは次の如く云つてゐる「全生涯の時間は無數の部分に分たれて



あるが、其各部分は決して爾餘の部分に依屬してゐない、従つて少し前に私が存在してゐたからと云つて、今必ず私が存在してゐるとは云へない<sup>2)</sup>。作用の意識としての自覺は單なる現在において生きる瞬間的なる意識であらう、しかし私の存在はしかく點的のものであらうか。もし自我の存在が内部知覺としての思惟と共に瞬間的なるとき「思惟す」(Es denkt)とは云へるとするも「我思惟す」(Ich denke)と如何にして云ひ得るのであらうか、即ち自我の存在が意識の思惟の仕方と區別して取出されることは如何にして可能であるか。

デカルトは自我の持續が可能なるためには、各瞬間毎に我を創造し或ひは保存する——創造と云ひ保存と云ふも見地の相違のみ——神が存在しなくてはならぬ<sup>3)</sup>と説いてゐる、併し、此の問題は獨斷的形而上學的思辨に依つて本體界にまで因果律を適用するの外答へるに由もないのであらうか。

註

- (1) Descartes, *Med. Zweite Med.* 8—9, S. 20.
- (2) Descartes, *Med. Dritte Med.* 36, S. 40.
- (3) Descartes, *Med. ebenda.*

## 八、内部知覺に於ける個別化的契機の缺除

心的現象に對する判斷としての内部知覺は普通の判斷の如く主語と述語との關係に於て成立するものでもなければ、又記憶を介して印象を規定する如き反省でもないことは既述の如くである。即ち内部知覺は、印象と反省又は了解との間に記憶が織り込まれて時間的持續なしには成立せぬ外部知覺的判斷ではない、それは印象と反省との距離が無限に縮少され印象が直ちに反省となる如き無限に速く充實される意識である、その限り時間の唯真中にありて無限に速き反省として時間を超えるものであると云へやう。即ちそれはある時間に於て限定され個別化されてゐない、故に布伦タノは次の如く云つてゐる、「自己認識は何人に於ても十分に限定された規定或は個別化的 (individualisierend) 規定を含んでゐない、それは個別的に直觀的なもの (individuelles Anschauliches) に關係なき普遍的表象である<sup>1)</sup>」かく時間における限定性を含んでゐないことは同時に様々な地點に於けるものにとつても同一の關係をもち得るが故に、それは空間的規定をも超えて遍在性を有すると考へ得る、可能性をもつてゐる。「内的に知覺するところのものを何人も他の人が同時にそれを内的

に知覺すると異なつて知覺しない、その人にとつて如何なる個別化的契機も存しないことは、上のことを證據立てる。」と云つて Brentano は個別的契機を含まぬ故に内部知覺はあらゆる人に普遍的であると考へてゐる。<sup>3)</sup>「實際聞く人は聞く人自體として特殊化されてはゐるが個別化されてゐない。」<sup>4)</sup>

かくて内部知覺は直下の意識における充實を有する志向作用として記憶を媒介とする事なき直接なる自覺である、その限りそれは時間的連續を含まぬとまで云はれる瞬間的なる無限に速き反省である、その瞬間性に於いて却つて時空的制約を超越する如き構造を内部知覺に於ける自覺はもつてゐる。併し個別化的契機の缺除と云ふ消極的規定は内部知覺の普遍性を可能ならしめる一半の條件たるに過ぎぬであらう、明證的自覺の普遍性の可能的條件は尙進んで求められねばならない。

註

(1) Brentano, *Psychologie*, III Bd. S. 90.

(2) Brentano, *Psychologie*. II Bd. S. 205.

(3) 尙又 Brentano は次の如く云つてゐる。

「自己を唯一のもの (*ein einziges Ding*) として知覺する限り、我々は自己を一般的に知覺する、我々が内的に知覺するものには個別性は現れぬ。他人が我々が知覺すると同一の規定を以つて知覺することは、矛盾なく考へ得るところであ

49] (Psychologie, III Bd. Zweiter Abs. Erstes Kap. § 30.)

(4) Brentano, Psychologie, III Bd. S. 113.

### 九、意識(思惟)と我

明證の根據を求めて内部知覺における充實的なる自覺的思惟に達する時、我々はその普遍性の可能根據を考へなくてはならぬ。ブレンタノは内部知覺の普遍性の可能を其れの個別化的契機の缺除に求めてゐる。併し眞に普遍的なるものは時空的なる特殊性に拘束されてゐないばかりでなく、そのうちに其の出發點と同時に到着點を含んでゐて前者が後者に歸すると共に、後者が又直ちに新らしき前者となる如き自己還歸的構造に於て成立しなければならぬ。即ち志向的客體の規定には誤ることあるも志向する作用そのものに宿る自我の存在の知覺は常に眞である。凡ゆる作用性質の多様を貫いてはたらいてゐる唯一の我は凡ゆる作用に於て分化して住しながら而もそれを超えてゐる。一の作用が反省的充實において直證されるときそれは亦直ちに新らしき作用の起點として自己を超えて行く。一の作用が初まる時、その初まりそのものが自覺され、一の作用が終るとき、その終りそのものが

自覺されて、意識は新たなる相に轉じる。過去の記憶も現在に於ける過去の記憶であり、未來の期待も實は現在の自覺面に於てのみ可能である。あらゆる作用樣態に分化しつゝその特殊相を貫いてはたらく自我は個々の思惟樣態より高次的であり普遍的である。あらゆる作用意識はたえず現在に於て內的に自覺されつゝ過去に没し去る、その生起し且つ没落する面こそは唯一なる永久の現在と云ふ大海<sup>メテア</sup>である。その永久の現在としての自我は出發點と同時に到着點をうちにふくむものとして普遍的である、しかもそれは對象的に抽象作用に依りて達せられた普遍者でなくノエシス的に與へられる普遍者である。「あらゆる *Cosmo* は決して離れ離れに外的に横るものではなくて統一されてゐる、それは *auseinander* でなく *ineinander* と云ふ構造をもつてゐる。心的なる諸作用は集合的 (*kollektiv*) ではない、と云ふのは、其れが獨立的に存在するもの (*für sich seiende Dinge*) であるとすれば聞く作用 (*hören*) と見る作用 (*sehen*) とは比較されやうもないからである。それは實在性統一性 (*eine Realität, Einheit*) をなしてゐる、それは聯關的 (*zusammenbestehend*) として內的に知覺される所の可分的なるもの (*Divisives*) である<sup>1)</sup>。「自己を個別化するものは内部知覺にはあらはれない、確かに我々は自己を一なるもの (*ein Ding*) として認識する<sup>2)</sup>。」とブレンタノも記述してゐる。

る。かくて各の作用が相互につらなることは其の各の作用に於て自我の存在が直證され得ることに他ならない。唯一の我はあらゆる作用性質に分化し特殊化しつゝその根柢に基體或は統一者としてはたらいてゐる。

かくてあらゆる作用に住しつゝそれを超えて轉ずる自由に依つて自我は各の作用に於いて自己の存在に關する明證性を享受してゐる。併し「かく出入自在なる我は形式的自我一般である、あらゆる作用意識なるものはかゝる純粹主觀に於ける内容の存在の仕方に過ぎない、かく論じて作用意識を否定することは事實を裏切るものである。實に色を聞くことはできぬ、音を見ることはできぬ、その限り作用の意識は明かに存する。それとともに、色を聞き得ぬ如く、聞くことを聞き得ない、即ち聞く作用の意識に於て自己を會得するものは聞く作用より高次的にして統一的なる我である。かゝる我はあらゆる作用性質の意識を脱離せる形式的自我でないことはあらゆる作用が分離し孤立してゐないと同様である。自我は「我意識す一般」として、作用性質の多を全然自己の外にしめ出して成立つ空虚なる一般者ではない。あらゆる作用の特殊態に住し宿りつゝも、それを超えて絶えず自己自身に歸りて sun の明證意識を與へる出入自在なる具體的なる一般者こそ自我である。かくかく思惟

すと云ふの *Sein* に於いて直下單的に我存す云ふ意識が充されて我の存在 *Dasein* が確證される所以は、個々の作用が實は我より出でて我に還ることに外ならない。必然的に充實されることは、そのうちに出發點と同時に到着點を有する如き構造をおいてない。即自態なる普遍的全體的意思としての我が、特殊化された様態としての作用性質の各、に於いて反省的に志向されるが故に必然に我存すと云ふ規定があらゆるコギトーにおいて必然に與へられるのである。

*Cogito, ergo sum.* は歸同還歸の體驗である。かく統一者又は全體者としての我の背景に於て各、の思惟又は作用意識が成立する故に、「思惟す」でなくて「我思惟す」と云ひ得るのである。こゝに我の存在は思惟又は作用意識と明かに區別されるのみならず、前者なくして後者もあり得ぬと云はれるのである。故にデカルトは次の如く云つてゐる。「私のうちには或特殊なそして私より異なつた諸能力即ち想像力や感覺がある、私はそんなものはなくとも私の全自我を明晰判明に意識し得るが、逆にそれらのものは自我なしに、即ちそれらがそのうちに存する思惟的實體 (*substantia intellectualis*) なしには意識され得ない。」

註

自覺、綜合、自然

(1) Brentano, *Psychologie*, I Bd. 221—231.

(2) Brentano, *Psychologie*, III Bd. S. 113.

(3) Descartes; *Meditationen*, Sechste Med. 18, S. 67.

### 一〇、認識論的契機としての直観に依る充實

内部知覺は必然的に十全に充される志向作用として明證性を具備してゐる、如何なる作用性質に於てはたらくコギトも必ず我の存在と云ふ自覺において反省され充される。内部知覺は誤謬の餘地なき明證意識として必然に充實される。現象學者は眞理の標識として直観に依る志向の充實をあげ、之を認識論的契機と稱してゐる。單に志向するのみで何等直観によりて充實されざる虚しき意味作用も少くない。意識の根本性格としての志向作用は直観に依る充實を得てはじめて眞理を證示し得る。充實とはフツサールに依れば *Trans* であると云はれる。<sup>1)</sup> フツサール自身が意識の志向作用と充實作用とは具體的に統一的なる全き作用をなすことを明説してゐるのであるが、全き意味に於て現象學的に「理性根據」たるべき充實の契機なるものは、志向作用に單に又外的に附け加はる或物の如く考へられてはならぬことは明かである。眞に理性根據としての充實の契機なるものは根柢にありしものが



志向作用を媒介として自己より出發して自己に還ることに外ならぬ。特殊なる規定性に於て自己を反省し、もつてその特殊態を即自的なるものの分化又は特殊化として定立し、その根柢をなす全體の統一に於ける自己限定として自己を自覺する再認の意識こそ、全き意味において充實の契機でなくてはならぬ。Cogito, ergo sum. も亦かくの如き構造に於て成立するものでなくてはならぬ、何となれば「我思ふ故に我存す」の自覺こそは必然に充される志向作用として絶對的の明證性を有すると考へられるからである。各の瞬間的現在に於て成立する内部知覺の直接にして必然なる充實は「我存す」と云ふ規定を與へる、このことは、純粹自我がその任意なる作用性質において特殊的に自己を限定するが故に反省志向に於て必然に自我の存在が充實的に與へられるのである、即ちデカルトの云ふ如く我あつて始めてあらゆるコギトも可能なのである。我が存在するが故に我思惟すと云ふ意識は必然的に充實されて明證性を有するのである。内部意識の反省に於いて Cogito の志向が充實されるのは夫がその出發點なる自我に還るからである。我存すと云ふ明證的意識は我より出て特殊的に限定された思惟が自己に歸る時の主客同一の意識そのものに他ならない。

併し *Cogito, ergo sum.* に於て思惟様態と思惟者の存在との同一が常に自證されると云ふも現實の *Cogito* がつねにかゝる反省的知識をもつと云ふのではない。唯それを反省するとき直下に充されると云ふにとゞまる。三角形の思惟は直接には (*modis rectus*) 内角の和が二直角なりと云ふ知識を持つてゐない、併しその規定は三角形そのものの本質的構造として存する故にそれは三角形の反省的思惟に於ては直下にして必然的な充實態に於て與へられるであらう。同様に凡ゆる思惟は其の基底に自我の存在をその本質的構造として有してゐるから、その反省に於ては必ず「我存す」の意識は必然的に充實されるのである。全體的自我が根柢に存しそれがあらゆる作用性質に分化しながら均しく我の作用として自己に還る所に *Cogito, ergo sum.* の根本的明證が成立する。固より我に還りて充實されるとき、の明證的意識又は自覺は瞬間的である、併しその明證が随時隨所に可能なるは、その自覺が自己還歸的に全體的普遍的自我の統一に於て行はれるからである。全時間の根柢に我がはたらく故に *Cogito, ergo sum.* の瞬間的自覺の明證性も可能となる。全體ありて始めて部分が可能である、永遠なくして瞬間もない、このことはデカルトが完全無限光動を否定制限して不完全有限暗靜の知覺を生ずと説いたことと一般である。か

くて全體なる自我が存在する故に、瞬間的なる思惟は直下に全體者との合致を體驗して自我の存在を明證的に自覺するのである。併し現實には必ずしもそれとの合致を意識せざる自我の存在を説くことは無意識的自我を假定するものではないか。併し我の存在とその思惟とは超越的實在と意識との關係の如く二元的ではない。凡ゆる思惟が全體なる我の統一に光被されてゐながら我の存在を現實に意識しない事は滿目光の世界にあるもの光を知らざるに似てゐる。併し眼を翻して照顧する時、我は隨所なる瞬間的自覺に於て全き光の中に見出される、瞬間的自覺又は「此の現在」は直ちに「永遠の現在」に境を轉じ來り没落する。又我は其の思惟をおいて住する處を知らない。現在の特殊なる明證的思惟は夫が全體的にして永遠なる現在の地盤に於て其の本然に歸するとき現れる。永遠の現在としての自覺はあらゆる意識を包藏する普遍者である。併し時間に於て現れる思惟は常に感性的にして肉體的なる側面を有し、個人性を脱却し得ない、その限り永遠の現在としての自覺的思惟が普遍的なる根源意識たることを證明する道は直接にはない。一切の特殊の自我を貫いて生きる普遍的意識は直接には自己の本質を證明する道を知らない。その限り表現の理解と云ふ迂路を通じて一切思惟の豫想としての自覺の普遍性が

説かれる他はない。意識はつねに表現性を有し、自己を客観化することなしには成立しない、その客観化された意味形像の普遍性に即してのみ、根源的自覺の普遍性も説かれ得るのであるが、そのことは後に譲るとして、吾々は即自的に瞬間的なる明證的作用意識がその必然的志向充實性を全體的普遍的自我に負ふてゐる事を論じて、一應問題の範圍を制限したい。かく瞬間的なる *Cogito* が自己を止揚して其の根柢に全體的なる自我を要求すると云ふことは、換言すれば、デカルト的自我がカント的自我の方向を指示することに外ならない。

註

(1) Husserl, *Ideen z. r. Phän. S.* 283.(2) Descartes, *Meditationen, Dritze Med.* 28, u. S. 335.

## 一一、註 釋 (其の一)

## 自我の連續性の問題

上に我々は瞬間的なる内部知覺的自覺の隨時隨所に於ける明證性は却つて連續的にして全體的なる自我の存在を假定することを見て來たのであるが、デカルトは

自我の持続性を拒んでゐる。(七参照) 自我は自ら保存する力をもつてゐないから持続的ではないとデカルトは考へてゐる。もし自ら保存し得る力をもつならば實體としての我はその完全性を自らに與へて我は神になるであらう、私に私自らを保存する力があるならば、私は私に缺けてゐる完全性を與へる力を持つてゐる筈である。<sup>1)</sup>「もし私が私の存在を私に依りて有してゐるものならば、私は疑つたりすることはな  
いであらうし、一般に何一つとして私に缺けるものはないであらう。何となれば完全性(その觀念は私の裡に存してゐるが)のすべてを私は自らに賦與するであらう、其の結果私自らが神となる筈であるから。<sup>2)</sup>」

併し、デカルトの神とは如何なるものであるか。デカルトの神は單に「生成の見地に於て」(in Hinsicht des Werdens)のみでなく「存在の見地に於て」(in Hinsicht des Seins)被造物の原因たるものであると云はれる。<sup>3)</sup>それはすべてのものを「無際限にして可能的」(in einer stets ohne Ende fortschreitender Weise und Möglichkeit nach) 含むのみでなく「實際無限に」(wirklich unendlich) 含むものである。<sup>4)</sup>かくて神はその「本質」(essentia)と「存在」(existentia)とが不可分離なることは三角形の本質から其の内角の和が二直角であることが分離され得ぬと一般である。<sup>5)</sup>

神はかくて存在と本質との完全なる合致である。「神はその完全性に何一つ加へることなき程現實的に無限である」<sup>6)</sup>。それは起り得べき一切を顯勢化しつくして此の上何一つ潜勢的なるもの又は可能的なるものを残さぬ存在である。即ち神に於ける存在と本質との一致は、一切の時の流れを完全に包んだ永恒の相に於て、(sub specie aeternitatis) 成立するものである。かゝる實質的なる眞無限はあらゆる存在の根柢であり、自我は云はゞその「影」であるとも云へるであらうが、自我の現實的存在は時間的なる一面を遂に脱却し得ない。自我は持續的であると云ふも、それは絶えず發展する外部知覺に即してのみ可能なのである。内外知覺の一切現象を時間の全系列に亘つて一眸のうちにをさめて自覺する神は、その思惟を直下に充し其の思惟に依りて内容を生産する知性的存在である。自我は連續的でありその思惟に於て存在を宿すと云ふも、それは作用意識と云ふ形式性に於てのみ可能なのである、即ち常に無限に發展する直觀的内容の多様に即してその指示に従ひつゝ發展する作用の統一性に依り、その各の作用において自我の存在が自證される所に自我の連續性と存在とが成立するのである。かく自我の連續性と存在性とは神のその如く實質的でなく形式的なるのみならず、外的知覺の無限なる發展に相關的なる連續性で

あるから自我の持続性は完結的でなく開放的である。神の存在は完結的であり永遠であるが、自我の存在は開放的であり時間の地平圏を超え得ない。神は眞無限であるが、自我は時と共に發展する假無限である。唯、自我は知覺的多様と相關的に發展する作用意識の形式性に於て隨時隨所にその存在を直證する點に「絶えず没落する明證的完結性」を有するにすぎない。神の存在は完結せる永遠に圓滿充足してゐると思惟されるが、自我の存在は動き行く永久の現在の任意の斷面に於て直證されるのである。自我の存在と持続性とを語るも、自我のそれはデカルトの意味で「實際無限」なのではない。自我の持続性は神のそれに於ける如く實質的ではなくて形式的である、自覺又は思惟の反省的意識は知覺的多様に即して行はれる、それは常に偶然性を媒介としてゐる。即ち、Oginoの明證性は必ず全體的にして連續的なる自我の存在を要求し證示するが、あらゆる時間的思惟の根柢たる全體的自我は必ずしも自覺の光に於いて全的に自己を示してはゐない、即ち全體的自我が明證的意識として現象するのは直線的連續性に於てではない。その限り、現在と云ふ時の様態は、デカルト又はアウガスチンの云ふ如く、延長を有せずして點的である。併しかゝる現在の明證的自覺こそは一切を包藏する無限なる知性的者の大海に於いて時あつて

輝き出る知性の片影である。凡ゆる現在の明證的意識の無限なる去來面として根源的にして全體なる自我が時間の根柢に生きてゐる。かゝる知性的者の背景に於いて現在の瞬間的明證意識は明滅する。根源的自我は瞬間的なる思惟の根柢をなしながら、それを超えて無限なる虛無性と包藏性を湛へてゐる。かゝる全體の知性は知覺的多様の特殊態に結合して自己を限定し、その自己否定態に於いて自己の無限性を自覺して、瞬間的なる明證意識に達する。知覺的質料の特殊態に於いて自己を限定し、その限定性に於いて却つて自己の本然性を自覺する自由なる意識こそは、全き意味に於いて永遠と時間普遍と特殊の綜合である。凡ゆる特殊の規定性を通じて生きる普遍的自我は絶えず切斷されながら自己を維持してゐる、かゝる自我は直線的平面的連續性の代りに飛躍的包藏的連續性を有して、たえず知覺的多様の特殊態に即してのみ生きてゐる。かゝる形式的にして飛躍的なる連續性を有する限り、自我の存在は神の存在の如く實質的にして充足性を有してゐない。故に自我に連續性を認めることはデカルトの云ふ如く自我を神と同格にする歸結に導くものではない。デカルトの神と自我との關係に關する所説は極めて深き示唆を含むにもかゝはらず、我々は以上の如く結論すべきであると考へる。



註

- (1) Descartes, Meditationen, S. 152. (Anhang zu den zweiten Erwiderungen)
- (2) Descartes, Op. cit. Dritte Med. 35, S. 39.
- (3) Descartes, Op. cit. S. 339. (Antwort auf die fünfte Einwände)
- (4) Vgl. Descartes, Op. cit. Dritte Med. 42, S. 42.
- (5) Descartes, Op. cit. Fünfte Med. 8, S. 55.
- (6) Descartes, Op. cit. Dritte Med. 35, S. 39.

一三三 註 釋 (其の二)

バラギの批評

内部知覺に於ける直接の自覺は記憶の媒介を含まざる反省とも云ふべき直下の  
 而も無限に速き反省である。併し無限に速き反省は時間空間の對立を止揚しそれ  
 は世界を數學的の一點にて把握する、かゝるものは認識の理想に止まるとバラギ  
 は考へる。<sup>1)</sup> かくて無限に速き *Discern* にはもはや現象界なるものはない、かゝる *Discern* は  
 現象界に監禁されないでその外に世界の創始者 *Urheber* としての立場にある。<sup>2)</sup> かく  
 る立場にあつて世界を外世界的なる一點より構成し得るものとせば、我々の思惟は  
 常軌を逸するものとなる。<sup>3)</sup> 無限に速き反省にては時空の二元性は數學的なる一點

に歸するが、有限の速さの反省にては時間空間は二重秩序を有するに止まる、——とバラギ―は論じてゐる。

外部知覺は印象を記憶の媒介によりて反省理解するものとしてその反省は時間的経過を含んでゐる、しかるに内部知覺は直下の把握を含むのであつて記憶の媒介を必要としない瞬間的の意識である、併し乍ら、内部知覺は作用の意味し志向する感性的内容そのものの多様と具體的には必ず結合してゐる、その限り作用意識は空間を基底とせずには成立しない、唯その空間的質料の多様を抽象した形式性において云はば——無限に速き反省として作用意識は成立する。元來空間的なる志向客體と相關的にのみ成立する作用の意識は宛かも單なる時間の次元に於て成立するが如く思はれるのである。即ちかゝる抽象的形式性に於いて印象と反省の距離が極微に達する無限に速き反省として作用意識は成立する。その限りかゝる反省はその志向する客體内容を生産することはもとより不可能である、そののみならずかへつて客間的質料の多様にたえず制約せられるのである。かゝる形式性において成立するが故にそれは決して其の思惟によりて現象界を生産創造する如きものではない。併しあらゆる作用はそのうちに全體的自己の存在を反映し、各意識は自我と

云ふ全體と濃度を等しうする部分である、かゝる構造に於いて成立する無限に速き反省として *Cogito, ergo sum.* は認識の理想を示すと云ひ得るのである、かくて以上の如き意味に於いて作用意識としての内部知覚における自覺は、デカルトの要求した如く明證の基準を與へるアルキメデスの不動點であると云へるであらう。

註

(1) Palágyi; *Logik auf dem Scheidewege*, S. 323.

(2) Palágyi, *Op. cit.* S. 326.

(3) Palágyi, *Op. cit.* S. 323.

### 一三、明證性と普遍性

我々の出發點は明證性の問題であつた。元來明證性への要求は體驗の事實に於いて最後の認識基準を見んとするものである、その體驗の事實が感性的經驗であるにせよ或ひは内的意識の事實乃至現象學的構造であるにせよ、體驗の權威のみに頼りそれに執するとき、本來の明證性と主觀的な盲信又は偏執性とは區別され難くなるであらう。「事柄そのものへの要求が客觀性と普遍性とを犠牲にして充される時、それは哲學的なる *Nüchternheit* を超えたるものとなるであらう、それは「あらゆる妄

想に門戸を開く」に到るであらう。かくて明證性への要求は普遍性への努力と協力し得ねばならぬ。明證性は同時に「理性根據」でなければならぬ。

我々は以上に於いて *Cogito, ergo sum.* が明證の規準たることを考へ、その明證の普遍性を理解せんがために、其の構造を考察して、内部意識が個別化的契機を排除するが故に時空的特殊的規定性を超える可能の存すること、第二に其の明證性が自我の自己還歸の本質構造の上に成立することを學んだのである。明證的意識が普遍意識の光の下に可能であることを學んだ我々は明證性への努力を哲學的ならしめるために、此の方向を更に徹底しなくてはならぬ。唯體驗の事實を説く立場は稍もすれば「視靈者の夢」に墮するを思ふ時、我々は事實に沈潜する眼をあげて、その體得された事實の底に語るものの意味を全體の視野に於いて理解せねばならぬ、即ち主觀的事實に徹底しそれに沈潜することを踏切板としてその根柢をなすものに轉じ得る自由を持つべきであらう。既に明證的意識は全體的意識の方向を指してゐる。デカルトの明證意識はカントの先驗的自我への踏切板をなしてゐる、我々は章を改めてその方向を辿つて見るであらう。明證的なる主觀意識の事實にのみ執して主觀的必然性を説く人に對しては我々はカントと共に次の如く云ふの他はない、少くと

も、單にその人の主觀が如何に組織されてゐるか、と云ふ性質に基づくこと、がらに關しては他人と争ふわけには行かぬであらう。<sup>1)</sup>

註

(1) Kant, K. d. r. V. B. S. 168.